

『小林秀雄、自著「本居宣長」を語る』編集手帳、読売新聞 2010年3月4日朝刊を読む

評論家の小林秀雄、中村光夫、作家の水上勉、3氏が講演旅行をしたときという。三重県松阪市の宿で迎えた朝、小林の姿が見えない。中村氏が近所を探し、公園のベンチに座って講演の練習をしているその人を見つけた

「昨夜は、聴衆の手応えがなかったので...」。そう語ったという。<その日、その日が勝負だった。投げやりな一日とてなかった先輩たちの修羅である>と、水上さんが著書『文壇放浪』（新潮文庫）で回想している

小林が晩年の大作『本居宣長』について国学院大学で講演した録音テープが見つかった。4月にCDの形で発売されるという

同書は小林の思索の到達点とされ、録音テープはその成立過程をたどる貴重な資料である——といった学問的な関心は薄い人も、“修羅”をくぐり抜けた話術がどういうものであったか、ちょっと心が動くに違いない

小林は『批評家失格』と題する一文に批評の気構えをつづっている。<毒は薄めねばならぬ。だが、私は、相手の眉間^{みけん}を割る覚悟はいつも失うまい>。思い入れの深い作品を語る声からは、きっと、その気魄^{きはく}が聴き取れることだろう。

[コメント]

新潮社から出版の予定の小林秀雄先生の講演CDが待ち望まれる。日本とは何か、日本人とは何かを小林先生が本居宣長を通して考えた成果をよりよく理解するために。

- 2010年3月4日 林明夫記 -